ジャンボフェリー新造船「あおい」就航

2022.10.22　池田良穂

神戸と坂手(小豆島)、高松を結ぶジャンボフェリーに、32 年ぶりの新造カーフェリー「あおい」が、本日、神戸発 8 時 30 分の便から就航しました。

処女航海に乗船するか、陸上から撮影するか、だいぶ迷いましたが、まずはその姿を外から見てみることにしました。

前日、天気予報では曇りの予報でした。神戸港で撮るか、明石海峡で撮るかは、当日朝の天気を見て決めることにして早めに就寝しました。起きてみると、曇りで視界もあまりよくないので、明石海峡での撮影はやめて、神戸港で出港するのを撮影することにしました。8 時頃にポートアイランドに到着しましたが、カメラをもった人が一人と、関西テレビの取材カメラが準備されていただけで、岸壁には釣り人の姿だけが目立ちました。

出港時間の 8 時半になってもなかなか「あおい」は動き出さず、少し焦りましたが 15 分ほど過ぎてから船体が静かに動き出し、汽笛もならしてバックで出港。小豆島へ向かって処女航海に出港しました。

新港第 3 突堤のフェリー埠頭には、宮崎カーフェリーの新造船「フェリーろっこう」が停泊しており、その反対側の岸壁から「あおい」がバックで現れました。

広い海面にでてから回頭を始めました。背景の左に見える白い筒状の建物は、改装中のポートタワーです。

「あおい」は左に回頭して、船首を関門に向けました。船上には、処女航海を楽しむたくさんの乗客の姿が見えました。

中突堤のオリエンタルホテル、ハーバーランドの観覧車をバックにして、「あおい」は静かに走り始めました。

川崎重工の神戸造船所の前を通過していきました。ジブクレーンが林立していますが、今は商船の建造はしていません。

想い出のジャンボフェリー

さてジャンボフェリーとは、もともとは関西汽船と加藤汽船が、阪神～高松間の航路を在来型客船から双胴型カーフェリーにして 1969 年から共同運航を始めたサービスのニックネームで、使用する 4 隻が双胴カーフェリーとして当時世界最大の大きさを誇ったことから名づけられました。

1990 年代にその代替船として建造された船は、いずれも単胴型のカーフェリーでしたが、この航路のニックネームとして引き継がれました。

1998 年に、明石海峡大橋開通を契機に関西汽船は同航路から撤退。加藤汽船の 2 隻だけでの運航となりました。しかし 2003 年には加藤汽船も撤退しましたが、船員をはじめとする関係者等で新会社ジャンボフェリー(株)を設立して運航を続けました。2011 年からは、小豆島の坂手港への寄港を開始して島の需要創成に努め、その後、経営は安定化。今回の 32 年ぶりの新造船建造にこぎつけました。

なお、日本海運と四国フェリーが共同運航した神戸～高松のカーフェリー航路も、ニュージャンボフェリーというニックネームを使っていました。

第１世代船(世界最大の双胴カーフェリー)

加藤汽船の双胴カーフェリー「こんぴら」は 1969 年、姉妹船「りつりん」は 1970 年に日本鋼管で建造され、神戸～高松間に投入されました。当時は世界最大級の双胴型カーフェリーでした。

瀬戸内海を全速で航行する「こんぴら」です。船首に立つスプレーが大きいですね。

関西汽船の「六甲丸」は 1969 年、「生駒丸」は 1970 年に日本鋼管で建造され、神戸～高松航路に投入されました。

第 2 世代船（単胴カーフェリー）

1989 年には加藤汽船の「こんぴら 2」、90 年には姉妹船「りつりん 2」が林兼造船長崎で建造されました。船型は単胴型に変わりました。船首に高い居住区・ブリッジがまとめられたユニークな外観から「スリッパ型フェリー」とも呼ばれました。写真は「こんぴら 2」です。（市栄正樹会員撮影）

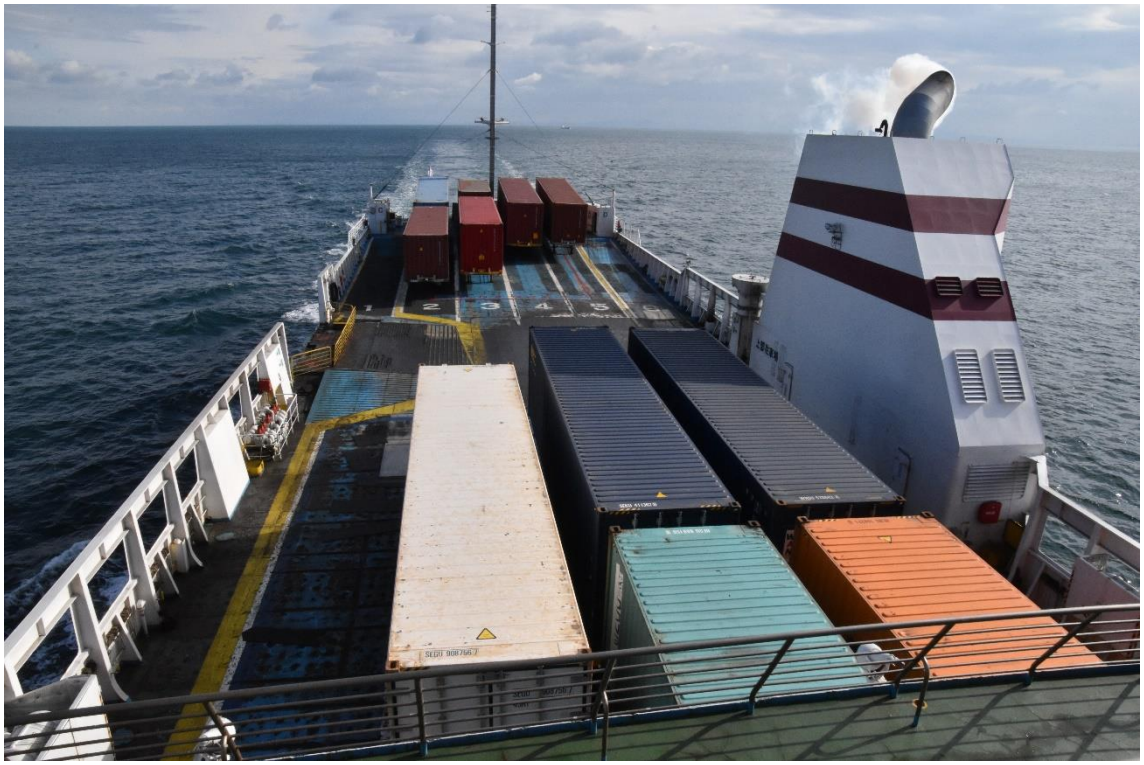
関西汽船では、1990 年にジャンボフェリーの 2 代目として「六甲丸」と「生駒丸」を新来島どっくで建造しました。関西汽船のジャンボフェリーは 1998 年に明石海峡大橋開通に伴ってサービスが廃止されました。（樽田和久会員撮影）

関西汽船の「六甲丸」。加藤汽船の 2 隻とはだいぶ異なった外観となりました。（古川秀臣氏撮影）

新会社「ジャンボフェリー」時代

経営が加藤汽船からジャンボフェリーに変ってからの「こんぴら 2」です。下の写真でわかるように、船首には猫のイラストが描かれました。

「りつりん 2」。船首尾に猫のイラストを入れるなど、宣伝に努めた営業が光っています。



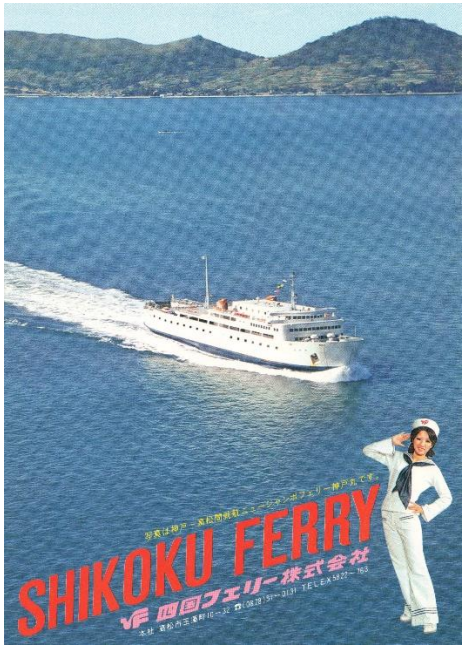
「りつりん 2」の露天車両甲板です。船内ランプはなく、陸上から直接乗車させます。

そして第 3 世代へ

32 年ぶりの新造船として「あおい」が登場しました!!

ニュージャンボフェリーとは?

ジャンボフェリーと同じ航路の四国フェリーの「神戸丸」等は「ニュージャンボフェリー」という愛称を使っていました。



四国フェリー絵葉書